３年生の合宿研修旅行における自炊指導

大向雅人*　宮本行庸*

Self-Cooking Program in the 3rd-Grade School Trip

Masato OHMUKAI and Yukinobu MIYAMOTO

ABSTRACT

In the Akashi National College of Technology, three school trips are programmed for the students of the 1st, 3rd and 5th grades. Generally the school trips are often planned for students to attend a tour through a factory or a research center in order to enhance their motivation for study. This paper reports an interesting trial for the school trip in the 3rd-grade, including a 'self cooking' program. In this program, several students stayed in a log-house type accommodation and cooked their dinner together for themselves. A questionnaire investigation shows that more than a half of the students are not used to cooking and that this program was revealed to be a stimulating and satisfactory one for them.

KEY WORDS: school trip, self cooking program, questionnaire investigation

１．はじめに

明石高専では宿泊を伴う合宿研修旅行が１年生、３年生、５年生に１回ずつで合計３回行われている。１年生の旅行では新入生同士の親睦を図ること、右も左もわからない新入生に対して色々な事柄に関するガイダンスを行うことが主たる目的となっている。５年生では卒業後の進路を考えるのに役立つようにと以前は工場等の見学が主な目的であったが、最近では就職活動の時期が以前に比べ非常に早くなったことでこの目的が達成できにくいこともあり、国際感覚を身につけることを目的として海外へ行く例が非常に増えている[1,2]。

３年生の合宿研修旅行はこれまで色々な経緯があるが、最近では工場等の見学が主な目的とされており、担任が１泊２日で企画している。工場見学といえば合宿研修旅行だけで行われるのではなく、他に授業を振り替えて日帰りで行われるものもいくつかある。本論文ではこの３年生の合宿研修旅行について新しい試みを発案し、これを実際に行った内容について述べ、その反響についてアンケート調査で調べた結果について議論する。３年生は中だるみの時期とよく言われるように、学生たちの気持ちが学校の方に向かないこともしばしばである。学生たちの気持ちが停滞しているこの時期に行われる合宿研修旅行を少しでも魅力のあるものとするために、リクリエーションの要素を取り入れながらも同時に学生にとって有意義で、かつ日頃あまり経験しない体験ができる新しい企画を生み出すことは、中だるみを少しでも良い方向に向ける手助けとなろう。

本論文で取り上げる新しい企画の最も大きな特徴は、宿泊先として自炊が可能なログハウスにグループごとに泊まり、夕食を自炊するというものである。メニューを考えるところからグループごとに行わせる。また、まともな夕食が確保できるようにするため、指導上配慮した点についても述べる。

２．合宿研修旅行の行程全体の概要

本論文で取り上げる３年の合宿研修旅行は電気情報工学科で６月中旬に行われたものである。１泊２日という短期間であることから、バスでの移動にあまり時

*電気情報工学科

間がかからないように都市部を避けると同時に近県である岡山県を宿泊地として選んだ。

１日目の午前中には姫路にある山陽特殊製鋼の工場見学を行った。電気情報工学科関連分野とは言いがたい企業であるが、大きな溶鉱炉や圧延の現場などはテレビではよく目にするが実際に見る機会があまり無く、こういうものを直に見ておくこと自体に意義があると考えたからである。また、企業側からは電気情報工学科に見学に来てもらうのは非常にうれしいと快く見学を引き受けていただいた。企業としては電気や情報関連の技術者が必要不可欠ではあるものの、実際には明石高専の電気情報工学科から就職希望がほとんどないのが実情である。

このあと姫路城付近で昼食をとってから２時間程度で岡山県の宿泊施設（図１）に到着した。その直前に最寄のスーパーに寄って夕食の食材を購入した。支払いは引率教員が旅行社の代行として全員の分をまとめて支払った。これは経費削減のために添乗員とガイドをつけなかったためである。到着は１５時過ぎで、自然豊かな田舎にあるログハウスの宿泊施設である。学生たちは、走り回って自然を満喫した後、夕食の自炊をして話をしたりゲームをしたりして床についた。

２日目の午前中は岡山ならではの観光名所である、岡山城と後楽園を訪れた。中でも後楽園は日本３大庭

図１　宿泊したログハウス

園として知られている。昼食は岡山駅前のホテルでバイキングとした。学生の年頃では食欲が旺盛であるので、満足いくまで食べられるようにとの配慮である。午後には土ひねりの体験を行った。ちなみに岡山の備前焼は日本の六古窯の一つとして知られている。陶芸の経験がない学生は多く、どのようにして陶器が作られるかを知る機会となり有益である。そのあと学校に帰り、学校到着は１７時頃であった。

３．自炊に関する事前準備等

自炊の一つとして、宿泊先で材料を用意していただいてバーベキュウをするケースがあるが、これは本論文の趣旨とは全く別物である。本論文における自炊とはメニュー、材料を全て自分たちで計画し、さらに材料の買出しも行い、自炊を行うことである。これは一つのものづくりであると考えられる。具体的には男子８名ずつ５つのグループと女子２名のグループに分け、グループ単位で宿泊するログハウスに備え付けられた台所で自炊をおこない、夕食をとった（図２）。

メニューは各グループで好きなように立てさせたが、とんでもない高価な材料を使って不公平が生じることを防ぐために、肉として豚肉の切り落としを使うという条件を設け、１人あたり 250ｇ程度を一括購入することとした。これについては予めスーパーに電話連絡で予約を入れておいた。また、米は 10ｋｇ一袋を購入してそれぞれの班に分け与えることとした。それ以外は

図２　ログハウス内での自炊

メニューを自由に考えさせた。その結果出てきたメニューは次のとおりである。

１班：鍋
２班：鍋
３班：豚キムチ、豚肉生姜焼き、サラダ、ミックスジュース
４班：豚肉生姜焼き、野菜炒め、たこ焼き、コーヒーゼリー
５班：しゃぶしゃぶ、たこ焼き、餃子、ホットケーキ、ゼリー
６班：冷しゃぶサラダ、オムライス、コーンスープ、ゼリー

ここで６班が女子の班である。班によって様々であ

るが、鍋はどちらかというと料理に手間がかからず、今回の旅行の趣旨からは少しずれはするが、自由にメニューを決めてよいということで、特に禁止にはしなかった。むしろ鍋を囲んでみんなでわいわい出来るのも違った意味でよいと考えた。色々なメニューを考えた班は、ある意味でやる気のある班であるといえよう。このメニューにはデザートもあるが、あくまで調理するものに限定し、パンやお菓子といったように買って調理せずに食べるものは入れてはいけないこととした。お菓子を買う場合は材料と一緒に購入せず、別途、自分のこづかいで買うルールとした。ペットボトルのお茶やジュースは調理するものではないが、食事に必要なものと考え、材料と一緒に購入することを認めた。ある班が西瓜割りをしたいと申し出たが、なかなか良いアイデアであったので特別に許可した。実際には１つの班にとどまることなく、みんなで分けて食べていた。

メニューを決めた次は、購入する材料を考えさせた。そのときにはどの材料をどれだけ購入するか、特に妥当な量を購入しようとしているかどうかが心配であった。料理になれていないと、８名分の量がどれくらいであるか見当つけにくい場合があるからである。そのため、事前に購入を予定している材料を報告させて、著者らがチェックし、多すぎる場合や少なすぎる場合は訂正を求めた。また、醤油や塩といった調味料は各班で共有できる。そのため、各班の購入する材料リストを１つの表にまとめ、調味料の購入が無駄に重複しないよう、どの班が購入するかを話し合って決めるよう指示した。

４．自炊の様子

男子では１グループあたり８名であるので全員が必ず自炊にかかわるかどうかは、班によって異なるが、基本的には自由にさせた。例えば鍋の班では調理といっても材料を切る程度で、鍋に入れて食べるだけである。餃子を作る班では皮で包むのをみんなで手伝いながら準備をしていた。別の班では２、３人が食事の準備をし、別の学生は出来上がるのを待っている状況であった。学生たちは、こういったそれぞれの関わりを通して人間関係を学んでいくものである。また料理の得意な学生は腕の見せ所でもあり、学生に聞くところによると一度家で予行演習をやってきたという学生も中にはいた。こういう自発的な参加ぶりがおのずとイベントを盛り上げてくれるのである。

前章で少し触れたが、班によってメニューが異なることで価格面から不公平感が出ることを懸念していたが、学生たちはそのような意識は全く無かった。むしろ別の班のログハウスに行って、食べながらしゃべったり、あっちの班はおいしいよとお互い情報交換したりしながら入り乱れていた。このように学生がおおらかになれるのは、材料を購入する際に学校側で一括して支払いをするため、金銭的なことを気にしなくてもよいからではなかろうか。

もう一つは学校での授業とは違って非日常をできるだけ経験できるように自由に、そしてのびのびと開放的にしてやりたい願いもあった。普通の研修旅行でホテルに宿泊した場合、周囲に宿泊している一般の宿泊客に迷惑をかけはしないかと心配になることがあるが、宿泊が個別のログハウスであったので、そういう心配をする必要がなかった。

５．アンケートによる分析と考察

今回の合宿研修旅行の後にアンケートによる調査を行ったのでその結果について述べる。「家などで料理をしたことがありますか？」の問いに対して

- よくある　1 人
- 時々ある　16 人
- 手伝い程度　15 人
- 全くない　8 人

と回答しており、全くないが８人いるものの全体の 3/4 の学生が何らかの形で料理に関わっていることがわかる。これは時代の流れを反映した形となっており、「男子は台所に入ってはいけない」というような古臭い考え方が薄れていることが読み取れる。そのため女子が２名しかいない電気情報工学科において自炊という企画でも、なんら問題が生じなかったものと思われる。

次に「夕食を自炊したことはやってよかったですか？」の問いに対しては、

- 良かった　25 人
- どちらかといえば良かった　16 人
- 良くなかった　0 人
- やるべきでない　0 人

と回答している。この結果から夕食自炊の企画は概して学生の満足度を十分満たしていることがわかる。自炊自体が良いというのではなく、他の学科ではやっていないことができたという満足感が原因であることもありうる。また、必ずしもこういう結果が得られるわけではなく、クラスによっては「自炊は面倒だ」といった意見が出てきて、不満が出ることも十分考えられる。しかし、それはそれで料理をすることの面倒さを体験して知ることに意義があると考えている。

次に「上記の理由や感想を述べてください」という

自由記述では色々な意見が書かれた。一番多かったのが「みんなと一緒に自炊して楽しかった」が 16 名、「みんなで一緒に食べておいしかった」が８名、「自分で或いはみんなで料理することがあまりないから」が５名あった。会食が心理学的に特別な意味があるというだけでなく、ログハウスという孤立した空間の中で食べることは日本古来の茶道にも通ずるものがあり、仲間をとても親密にする効果があると考えられる。また、ただ食べるだけでなく、自分たちだけで本格的に料理を作ることを体験することはものづくりの精神にも共通する。「１升の餅に５升の取粉」ということを肌で感じることができる。さらに自由記述では「みんなで協力して自炊をしたおかげで友達との仲が深まったように感じる」と回答したものが３名いた。他の回答としては「料理が嫌でない」１名、「自由でよかった」２名、「食べたい物をつくれた」１名、「色々学べた」１名、「片栗粉がいかに万能であるかがわかった」１名があった。

逆に否定的な意見として、「キッチンが小さく人数が多い」１名、「グループによって差があった」１名、「8割がた１人でやってしまったので初めに分担しておけば良かった」１名、「調理器具が足りない」１名、「あまりおいしくなかった」1名、「自分で作ったのでおいしくなくても文句が言えない」１名があった。これらの意見は、ネガティブな発想による意見であり、工夫や努力で解決できる物ばかりである。調理器具については予め備えられている器具を提示しており、他に必要な器具は持参するよう指示しておいた。そのため、ある班ではたこ焼きをやりたいということで、たこ焼き器を自前で用意していた。

６．おわりに

本論文では３年の合宿研修旅行において工場見学よりもむしろ夕食を自炊することを主眼としてログハウスに泊まる試みを行い、その状況とアンケート調査による結果について述べた。自炊することで、親が料理することの大変さを感じたり、１つの料理を作ろうとすると、あれこれ考えなければいけないことが出てくることを経験したり、良い体験になったことがわかった。ログハウスという非日常的な空間で仲間と過ごす夕食の時間は格別なものであり、非常に満足のいくものであったことがアンケート調査で明らかとなった。

参考文献

1) 大向雅人、宮本行庸：“電気情報工学科５年の海外見学旅行（台湾）”, 明石高専研究紀要、第 51 号、17-20 頁（2008）.

2) 上　泰、大向雅人、宮本行庸、藤野達士：海外見学旅行における高等教育機関訪問の効用，高専教育，第 32 号、877-880 頁(2009).